



思考の幹

OPENING ESSAY



## 学際研究の幹はどこにあるのか

学環に赴任してから、学際研究ということをとくに意識して考えるようになった。もちろん学環がそういうところだからなのだが、しかし、学生を対象に学際的な能力を涵養するというのは思いのほか難しいというのが正直な感想だ。なぜそうなのか、そしてどうすればいいのか、少し考えてみたい。

学環に赴任した当初は、学生が何か学際的な課題を見つけて（あるいは学生にそのようなテーマを与えて）、それを研究調査していけばおのずと学際的な研究ができると思っていた。ひとつの課題を深く掘り下げていけば、自然とほかの領域につながっていくからだ。

だが、そう単純なものではなかった。理由はおそらく二つあって、ひとつは、学際的な研究というのは、星の数ほどさまざまなあり方があるということ。何かひとつの分野を身につけるなら、その分野の教科書や基準書を読み、最先端の論文をフォローしていけば、方法論を身につけることができる。だが学際研究の場合は、何と何を組み合わせるかによって、あるいは何を課題に選ぶかによって、方法論がまったくことなる。心理学とロボット工学を組み合わせた研究と、メディア論と社会学を融合させた研究とでは、方法論も論文の書き方もまるっきり違ってくる。あるいは課題優先型（mission oriented）な研究であれば、その課題の数だけ方法論が必要な可能性がある。つまり、理論的にも現実的にも、普遍的学際研究というのは、存在しにくいのである。

そのような個別の多様性より一段階メタなレベルで、多少なりとも包括的な枠組みが形成できないかとも思うのだが、やはり相当難しい。

これにはぼくの側の責任も大きくて、もともとがそういう体系志向型ではない。良く言えば臨機応変に目の前の課題に対応する、悪く言えば行き当たりばったり到手近な課題を食い散らかす、ということばかりやってきたので、自分の今までの仕事を普遍的な方法論に仕立て上げるということが、なかなかできないのである。たとえば、飲み屋で開陳されている酔っぱらいオヤジの体験談みたいなもので、あんたはそれでうまくいったかもしれないけどさあ、というレベルの話でしかない。それ以上のいささかなりとも普遍的な方法論は、当然、学生にもうまく伝えられないのである。

だけどそれではお話しにならないので、自分がやってきた勉強や情報収集の仕方でも、わりと役立ったと思われるものをいくつかあげておきたい。

### (1) ある著者の作品はすべて読む

まず、論文や著書の読み方である。動物生態学者として国際的な業績をあげた伊藤嘉昭さん（名古屋大学名誉教授）は、これはと思う研究者を数人決め、その人の書いたものはすべて読め、と薦めている<sup>(1)</sup>。できれば年代順に、古い方から読むのがいいと思うが、それができなくてもある人の「作品」を網羅することは、文系・

理系・芸術系・その他を問わず、研究の方法論を身につけるうえで絶対有効である。これは広く薦めたい。

ぼくが大学院時代に選んだのは、進化生物学者リチャード・ドーキンスとジョン・メイナード・スミス、動物行動学者ロバート・セイファースとドロシー・チェニー夫妻だった。哲学者のデイヴィッド・ハル、古生物学者のスティーヴン・ジェイ・グールドにも挑戦したが、挫折した。

ドーキンスは「利己的な遺伝子」で有名で、近年はむしろ科学ライターというか科学啓蒙家としての大立ち回りが目立つが、その彼が大学院時代には厳密な動物実験をたくさんおこなっていて、普通の意味での研究者としての業績をたくさん出しているのが分かったときには、ちょっとした発見をした気分になった。誰しも修行時代というのはあるものだ。

メイナード・スミスは、ゲーム理論を動物行動の進化の解析に適用した人で、幅広い視点と柔軟な対応が魅力的だったが、やはり全作品を網羅するには至らなかった。セイファース＝チェニー夫妻は、ヴェルヴェットモンキーというアフリカに住むサルを対象に、彼らが意味論的なコミュニケーションをしていることを観察と野外実験で明らかにした人たちである。はじめて彼らの論文を読んだときは、その内容もさることながら、明晰なスタイルも衝撃的だった。

なんだかんだ言っても、学生時代に読んだ彼らの論文や著書が、結局血となり肉となっているのを、最近、とみに強く感じる。

## (2) 聴衆や同志を求めてさまよう

名指揮者で作曲家でもあるレナード・バーンスタインが、最晩年の1990年、札幌で開催されたパンパシフィック・ミュージック・フェスティヴァルのために来日した。その際、音楽家志望の若い学生たちに向かって、「自分は音楽家としてやっていけるだろうか」と疑問に思ったら、あなたは音楽家にはなれません。その問を発したがゆえに、あなたは資格はないのです」という、禅問答のような名言を発して話題を振りまいた。そのときは、なんと厳しいことを言う人だろうかと感じ入ったが、彼の伝記<sup>(2)</sup>には、なんのことはない、バーンスタインその人も、若いときは自分は音楽家としてやっていけないのではないかと随分悩んだと書かれている。

自分をバーンスタインと並列するのも不遜きわまりないが、ぼくも今まで、もう研究者としてやっていくのはあきらめようと思ったことが何度もある。動物学科の大学院のゼミでは、何を発表しても、データが薄い、風呂敷の広げすぎだ、検証できん、などと批判の矢が飛んできた。手を変え品を変え、説得につとめても、全然通じない。これにはまいった。大学院生活は楽しかったけれど、研究面では完全に行き詰まってしまった。しかし、あるとき生物学史の合宿研究会に参加して研究発表をしたら、「それは面白い！」という反応がたくさん返ってきた。おお、ぼくの聴衆はここにいたかと居心地がよくなり、以後、その研究会で知り合った先生のゼミにも定期的に参加し、科学史や科学哲学の手ほどきを受けることになった。

自分の聴衆は自分で見つける。聴衆がいなければ、作り出す。これも重要な作戦である。

### (3) 志を高くもつ

最後のティップスも伊藤嘉昭さんが述べていることだが、元ネタは発生生物学者の白上謙一さんの言である。白上さんは、生物学者としての業績はほとんどなかったが、哲学的な思索にすぐれ、独特の雰囲気醸成を醸しだして、多くの「弟子」に影響を与えた変わり種。ぼくは直接の面識はない。

その白上さんの名言がこれだ。「重要な研究をしようと努力するのではなく、自分のしている研究が重要と思われるような努力をせよ」。

世間で大事だと言われているテーマを追いか

けるのではなく、自分がおもしろいと思ったテーマが、世間でも重要と認められるような努力をするべきというのだ。自分の興味関心をとことん追求することが大事なのはもちろんだが、それだけでは不十分。社会的にも認められることが不可欠であることも合わせて述べていて、これは学問研究に限らず仕事全般に当てはまる真理なのだと思う。

世の流行を、つつい追いかけてしまう自分への戒めの意味も込めて、この、白上さんの至言を噛みしめつつ、学環の9年目を迎えることにしようと思う。

### 註

- (1) 伊藤嘉昭「大学院生・卒研究生のための研究法雑稿」『生物科学』38：154-159, 1986。
- (2) ハンフリー・バートン『バーンスタインの生涯(上・下)』福武書店, 1994年(原著1994年)。



佐倉 統 (さくら おさむ)

1960年8月13日生まれ。

[専攻領域] 科学技術社会論、進化生物学

[著書・論文]

『おはようからおやすみまでの科学』ちくまプリマー新書(2006, 共著), 『進化論の挑戦』角川ソフィア文庫(2003), 『進化論という考えかた』講談社現代新書(2002)

[所属] 情報学環

[所属学会] 科学技術社会論学会、日本進化学会、動物行動学会、科学基礎論学会、科学史学会、日本神経科学会、International Society for History, Philosophy and Social Studies of Biology; Human Behavior and Evolution Society